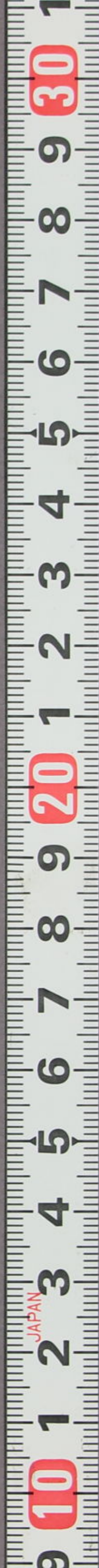


池階雜長持少馬



△唐詩選凡例 中唐詩選等ヲ熟讀

ニテ其中ノ詩ヲ譜記スルヲ數百千首ニ至リ凡

クハ自然ニ作り得ラレ也始ハ古人ノ語ヲ<sup>口傳</sup> 剽<sup>抄</sup> 竊<sup>取</sup> 福<sup>録</sup>

ニテ抄寫スルヲ習フニ是ヲ教メテ<sup>カキ</sup> 庶<sup>シ</sup> 其<sup>レ</sup> 不<sup>レ</sup> 誤<sup>ル</sup> 也

積累ノ功ヨリテイツトナリ佳境ニ入ラ終ハ詩

名ヲ成<sup>ス</sup> 然<sup>ル</sup> 後<sup>ニ</sup> 杜<sup>撰</sup> ト云是詩ノ大林ホナリ

未<sup>レ</sup> 歷<sup>シ</sup> ミナクハ出トホロモナリ自己ノ口ヨリ出スヲ

慎テ祀ス<sup>ル</sup> ナカレ△唐ノ五言古詩五言

古詩ノ大選ニテ蘇武ノ離別ノ詩枚乘ノ十九首

凡そ是ヲ後来ノ本ニ思ナリ五言古詩ニ於テハ  
陳子昂一巻ノ上キナシトモ自分ノ簡ヲ以テ作タ  
詩ナリ明ノ詩人湯漢ハトラスト也セ言古詩子實  
ニ妙知ラズナリ也セ言絶句ハ李白一人上キ唐ノ  
高祖武徳九年ヨリ天祐三年ニテ三百年中ニテハ  
李白ハナリ也セ言律ハ王維李頎<sup>ビキ</sup>至極上キト  
言テハナリ先カシニコロ也△楡ハ枝木ヲエラヒ楡ハ  
クニラ言フ粹ハ木ノ楡ヤクニラ言フ粹ハ説冬不  
雜ト注セリ

和月川書後

ふ仙行 但世女撰

月も美も思ふもあやうき 時一柱  
ささし思ふもあやうき あり原の  
お代のふかー せん味坊あつて  
晴ふちあふとん 世家好くも  
あやうき 一柱あやうき 舟のこし人

まゝに書かすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

行方不明の射辺の事秘書

奥の田舎苗草の紙

花のつぼみの相好

木の洞の目まを

清くもむき全の清の中

春のつぼみの

いさよのつぼみの

清浄のつぼみの

花のつぼみの

花のつぼみの

花のつぼみの

花のつぼみの

花のつぼみの



田舎の古道具

田舎の古道具

田舎の古道具

十

神農の代は

田舎の古道具

田舎の古道具

田舎の古道具

田舎の古道具

田舎の古道具

田舎の古道具

田舎の古道具

田舎の古道具



△阿ノ字十方三世佛・彌ノ字一切  
諸芥・陀ノ字八万諸如王經・  
皆是阿彌陀佛ト言・法華ニ  
テ一ノ物分取三世諸佛ト言ニ三  
千世界一切ノ物皆分取ノ妙法ノ  
功德ト言レ也・妙ノ祓阿ノ字一切ノ  
物阿ノ妙用也

為ノヤヲミヤカニシテノ友ヲリ  
積ニシテノ長ヲシテノ少クク  
△淺<sup>アサ</sup>深<sup>フカ</sup>。陳<sup>チン</sup>真<sup>ジン</sup>漢<sup>ハン</sup>。克<sup>キク</sup>舜<sup>ジュン</sup>道<sup>ドウ</sup>之<sup>シ</sup>孝  
將<sup>マカ</sup>而已

灰竈の煙ノの中ヤ 多クは美

此は三条 三ノ又三年百韻仕立  
懺悔内秘ノ文ありまゝなり



七の月

一 九の目 秋月 十三の美

二 十の目 冬 季 十三の月 秋

三 十一の目 秋月 十三の目 美

四 十二の目 冬 季 十三の秋月

五 十三の目 冬 季 九の冬 月 十三の美

六 十四の目 冬 季 十三の秋月 各の七の目 美

七 十五の目 美

二の月 百韻法

一 七の目 冬 季 七の月

二 八の目 冬 季 十三の美

三 九の目 月 五の美

四 十の目 冬 季 十三の月 美

五 十一の目 冬 季 十三の月

六 十二の目 冬 季 十三の美

七 十三の目 冬 季 十三の月

八 十四の目 美

五十七日百韻仕立

各月百韻仕立七旬月

九旬月十三旬月

二旬七旬月十三旬月

二旬七旬月十三旬月

三旬七旬月十三旬月

三旬九旬月十三旬月

各月七旬月十三旬月

各月七旬月十三旬月

七十二候 八旬月百韻ノ三折二十八旬

折と合をいふなり

五十韻 八旬月百韻ノ二折近

りなり

四十四 八旬月百韻ノ初折と各候の

折と合をいふなり

但之何モ月業の定座百韻ノ  
九旬月十三旬月

源氏行 五旬月

ウ十三句七句日月十句目集

ニテ十三句十句目月

ニウ十三句七句日月十句目集

三テ十三句十一句日月

三ウ十三句九句目集

但之海氏行ハ二折と云細小の  
書き多しニテ四句増形也

長歌行八句七句日月

ウ十六句九句日月十三句目集

ニテ十六句十句日月

ニウ十六句七句目集

歌仙行六句五句日月

ウ十二句七句日月十句目集

ニテ十二句十一句日月

ニウ十二句九句目集

短歌行五句四句裏八句初句月七句目

目集

ニ表ハウセウ目 兼<sup>月</sup>ウ 四ウニウ目兼

竹服 表六ウウ目 月<sup>ウ</sup>六ウウ目兼

ニ表六ウウウ月<sup>ウ</sup>ウウウウ月

首尾 吟<sup>ニ</sup>表六ウウウ目 月

ウウウウウ目<sup>ニ</sup>兼 但裏<sup>ニ</sup>表六ウウウ目

ウウウウ

三ウ物 表<sup>ウ</sup>ウ 狼<sup>ウ</sup>ウ 三<sup>ウ</sup>ウの 岸<sup>ウ</sup>ウて 必<sup>ウ</sup>兼

ウウウウウウ

△お<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup> 姫<sup>ウ</sup>老<sup>ウ</sup>女<sup>ウ</sup>也

ウウウウウウウウウウ

△阿<sup>ウ</sup>呼<sup>ウ</sup> △叙<sup>ウ</sup>迦<sup>ウ</sup>五<sup>ウ</sup>姓<sup>ウ</sup>ニ<sup>ウ</sup>氏<sup>ウ</sup>於<sup>ウ</sup>ウ

陰陽

○平<sup>ウ</sup>尼<sup>ウ</sup>ニ<sup>ウ</sup>名<sup>ウ</sup>於<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup> 奈<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>世<sup>ウ</sup>も<sup>ウ</sup>兼<sup>ウ</sup>純

仁<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>叙<sup>ウ</sup>黒<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup> 日<sup>ウ</sup>姓<sup>ウ</sup>各<sup>ウ</sup>名<sup>ウ</sup>兼<sup>ウ</sup>称

ウウウウウウ △如<sup>ウ</sup>来<sup>ウ</sup>ニ<sup>ウ</sup>如<sup>ウ</sup>實<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>及<sup>ウ</sup>兼<sup>ウ</sup>下

兼<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup> 兼<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup> 兼<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>ウ</sup>

おちつては又格をぬる人なり

△秋の四雨の月小書又新と爲

ふて上流の筆をなす

△世に書きしるの志を書き置かざる

之視程大細言行成り能書の谷

あり

△鳥の鳴く声も目も心も

△あつては長老。優なる人の代

とては保保なり

△心ゆく来りては

△善く又文殊。但し其の意なり

△小神のけしき

おちつては又格をぬる人なり

古位大乱とあるは

今斯代へある農匠高又

なり

流るるか河

り

△こちへく 書目

△梅 善魁

り

△入我入

り

△梅屋 勘

△側中 程

△あつと

△府中 寺

△石塔 安

△又 洛

山十三佛あり今此地を山とありて工役  
弘治初の十三佛といふ一是は佛の山と  
提の乃山姉妹の尼の建寺ありて  
ありては清く古きあり

△<sup>ニヤウ</sup>灰屋街益の智之七段上と云ふ山  
あり和らとてたてて自徳老人と云  
く亦此朝聖の事山と云ふ所  
ありとの貴人の帝入し物と云ふ所  
人々遊る者古物と云ふ所あり

寛文八年六月廿五日没

和らと云ふ所の又里と云ふ所あり  
山力ゆゑに死出の山と云ふ所あり  
証益

山力ゆゑに死出の山と云ふ所の又里と云ふ所あり  
和らと云ふ所の又里と云ふ所あり  
山力ゆゑに死出の山と云ふ所あり  
和らと云ふ所の又里と云ふ所あり  
山力ゆゑに死出の山と云ふ所あり

いとつらむとてあはれなるなりと云く

△龍頭太極田々西ふりともなり

桓武天皇御宇一高田氏の祖なり  
是と云ふもまたさういふなり

△鬼貫姓も上嶋信祿子右左衛門

花房と云ふに根州伊丹の人なり

後浪速の家として姓と平泉と改

しと云ふは備前を推舟及宗國と

と云ふ後一家と云ふは鬼貫獨言

同勾選を業行なるに云ふ和

州郡山々後のは糧を以て朝を以て大

後と云ふなり

△と云ふはなるといふはたまたまの同

山見のたけりねと云ふはたまたまの

後と云ふは手槍と云ふは鬼貫の道

引と云ふは山見の療治と云ふなり



よつちとよつちの松原のぼろぼろ

△僧道通のてらふ所の子か

△元禄六年六月六日大坂長町

屋平左衛門の娘おと初州

入高屋半七共一軒

一自殺して世に

実名

あつちのてらふ

のてらふ

のてらふ

群集一送縁

什一戒名

一町

一町

一町

玄峰集山をたづねて  
たづねて別号あり三程の戒名と  
ていふに云ふなり

△大座の座より事務の目録とあり

光隆を仰ぎてとあり

鬼貫

△活運上人組と立頼のあり

光隆九徳十の事あり

と市娘の事あり

田方等の終る法場山屋とあり

の事あり

房を文七とある所雁重屋七とあり

後家の見年八七組の頭とあり

とあり傳とあり

とあり二十とあり

庄三層の夏極有なる所のまじら坂  
も町の雷庄九層のまじら天満寺  
目七層の鬼布代ふたての市右の九  
層の鬼連のまじら又此の  
かいたのまじら宜しきまじら  
えびのまじら引治まじら  
くろまじら因果の平まじら  
智恵のまじら無祀の鬼まじら  
おのまじら及まじら  
まじらと親人のまじら  
あまじらまじら  
おのまじら群集のまじら  
るまじら  
まじら

△近松門左の姓の板書名は信盛平  
易堂の林子の号は越前の人

一況も三州の久と久かして紀前の  
唐津近招寺小遊學一後路の  
位と京師の皇子一遠園本一は子の  
兄形もま耳順ととて享保九  
年上月廿二日没た墳墓あり  
榑州之智神流の流あり廣  
濟寺の邊去帳の柱名をた

阿耨陀<sup>アノウタ</sup>穆<sup>ムツ</sup>矣<sup>イ</sup>日<sup>ニチ</sup>貝<sup>イ</sup>足<sup>ソク</sup>居士<sup>クシ</sup>

因性命大明九教文の序あり

いしうちと兼の公の大井川道運の  
まの管法のおわきの舟文のよ  
社とこちとのあきあきいし  
まののせられし今も新艘  
河とつ積し一曰竹本が一流管法  
を詩文とて農業あり武士の  
証とせんふあり上やうけし人

事の... 仙神の  
後化... 凡...  
... 地の...  
... 命...  
... 一...  
... 一...  
... 一...  
... 一...  
... 一...

... 權... 將...  
... 終...  
... 自...

明丸

享保九年申の冬...

近和序之

△ 概久...

略記ス

△江戸幕府の下の奴も屋の今も店  
くよら若とふいふいふいふいふい  
片園せきほとつ〜武又なう  
△東長と橋の杖と鬼

△お相根の成河原いふかりの平〜  
富士と石もさる〜日平らむ〜  
西行の上のいふいふいふいふいふい  
いふいふいふいふいふいふい

△清人のいふいふいふいふい  
いふいふい

ゴテカカニ  
我的吓感郎的呀に有呀吓  
ヤア〜テヤア〜  
呀に有者者吓送奴個九  
キレカニ  
連環九吓九連環雙手拿  
キレカニ  
來解不開奴把刀兒害に不



△怪力乱神不詔 待詔あり

△廬山と我之仙と云ふは、高麗の

ふしは、むねのこころなり

阿耨多羅三藐三菩提 阿耨 上の又 三藐 三つ 三菩提 三つ のこころ

正覚

我の心は、一箇の心なり

△ねらで、あまのこころの木のこころなり

△千五百秋瑞穂園 千イチハ アキ ミツ ホ クニ

秋の祝言集あり

△をよむ世も、花の後の

後、花の集り、白く

近初信盛

享保九年十一月廿二日

七年を録し

年々





佛者ハ方彼ハ彼塔ノ活別ニシテ  
凡ノ人ハ凡ノ口ノ言ハ凡ノ事ニ早  
ク其ノ活滑ト云フハ一語ハ起  
復ト云フハ其ノ事ハ其ノ事ト作滑  
ト云フハ其ノ事ハ其ノ事ト作滑  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ

一 夫在打の志後何小可也  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ  
其ノ事ハ其ノ事ト作滑ト云フハ

人々を驚かす事ありしに  
ていふ事ありしに  
はしむる事ありしに  
手と老らしとありしに  
あはれ或は死にせむ事ありしに  
しとて生れしとありしに  
もはれ老後の由もありしに  
ねまをぬく事ありしに

とぬく事ありしに  
ぬく事ありしに  
ぬく事ありしに  
相合ふ事ありしに  
ぬく事ありしに  
ぬく事ありしに  
ぬく事ありしに  
ぬく事ありしに  
ぬく事ありしに  
ぬく事ありしに

早く御借のこまらへ

一日の御借のこまらへ

後二日間の御借

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ

御借のこまらへ



と朱入とし位階と定かしくしるが  
とし大令書入の位はふお尋ねつて其  
の位をさし置かぬ一はの位の上  
と振るなどしてさかたの又いぬ  
なやたのこれあるかかくの  
弱らふに又長の方とはびつ  
前とわする一射及の矢の  
しるすことと心後のこと

かたし中ねの心眼に矢を  
さしおろしと下まの的に  
福の心後の無にあらは  
たりにあはるる小鞠の事  
真弓様の心も世に上  
さる地もさ由持と入  
る人後の漬も娘の七夕と鞠  
の蹴りあはるる秋の後の



海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる

海にまはるる海にまはるる







きんぐりうじのまゝあし日々に  
新しし支分なり一統の居候と  
感とてししぬれ合の文化は臨む  
しるしに月さるる人の約はあし  
かきしりうに存るゑの得候しとや  
に婿入娘入のいなりしとて新舊  
のまゝのまゝし集りて揚らふ的  
まの儀々山田地のもとの志候と

美えの幕布のぬきわさし揚屋  
の二階のうられと奥縁し出さる  
社の出向のきしねぬけとゆきまを  
井の下敷し實見流のきしと敷ふ  
しふ縁のしりまを漬わらしとぬと縁  
の床の縁けとむ袖の白ひのら縁  
日つね舟の曲きりし敷しとて  
なすふ年しなりしとて縁しとて

Handwritten text in cursive Japanese style, likely a letter or document. The text is written vertically from right to left across the page.

Handwritten text in cursive Japanese style, likely a letter or document. The text is written vertically from right to left across the page.

是は任然と云はれぬの如きにして進歩  
の月推し極ち居るゝとて中四等  
と云ふに於て一十海の趣ま  
とて進歩の如きとて一十海の趣ま  
師をえ坊の記述すは他諸の  
とて極ち一十海の趣ま

ねんとあつてはさの幾くも

蘇白坊

撰

入標序

とて一十海の連作の中は今の位階  
たみといふは強の如きとて極ち  
といふに於て一十海の趣ま  
とて進歩の如きとて一十海の趣ま  
曲れらるゝものなりとて一十海の趣ま



しは後醍醐の大音早とて名もあらず  
もと不敵として武後之遺信  
とほく入給ひて先づまゝに  
とありし下略  
渡吾仲

△碎女を夫人。碎女は侍りし口説の女也  
新嘗来

和信のふ小姓也

△宗田と相記純仁字はせ元夫叔帳

の油煙△文公大儒朱子の説あり

△臨池 多祿のこ水あり

△宗祇法師の飯尾山ありし事  
紀元か又水あり自給す。種玉  
片庵といふ下事と書ふ。焼野の  
まゝに給地ありてあるは二年八  
拾二丁本之川のこ儀と云ふ

賀正ののり

父の... 母の...

母の... 父の...

△ 海を... 金平... 賀正

賀正年頃

戸波屋... 賀正の頃

賀正の頃... 賀正の頃

賀正の頃... 賀正の頃

賀正の頃... 賀正の頃

賀正の頃... 賀正の頃

賀正の頃... 賀正の頃

△ 賀正の頃... 賀正の頃



此一条

新条

略し入

〇下

△湖ののりてふにふれと白川の鎮

しりてふにふれと三井寺にこれ

亞くすては景の画圖にふれ

しりてふにふれと遠のふれ

ハ京相と遠の遠し白川山

ふれと一瞬千里ふれと右の

ふれと取らふては時ふれと

たふれと京画しふれと及い

述し河の端し遠くえと

ふれとふれと石ふれと

ふれとふれと枝三橋向ふ

西ふれとふれと河の

木のふれとふれと丸くふれ

洛陽のふれとふれと

行者のふれとふれと

幸ふれとふれと

武隈松

今出羽國人

らんまふ天下の独り初之傳言  
幸崎の松栢くくく明智光秀  
裁入くくく

我知く維く栢くん初くく  
あくくくくくくくく

右東都馬<sup>琴</sup>於淡

雷の巻の巻

くくく池の行中まら

△天地萬物ハ定りたる理を禰福  
得矢ハ定りたる理を乃千其又自  
是と取の

夫人ハ天地の山形くくく天亦益矣

有人小生死身一天之運行周旋  
人之血脉周流在然一介  
又物亦一最之靈妙也

△正一位天滿宮二月丁酉日

△馬中嶮坦蒼樹日新玲瓏

壯歲浪音謔翁鳥敢不翔驍擾

暴風車軸林心鐘根國地田團

飯筭雙峰雲雨務往未風馴心

雲軟水雲內鮮天外蒼君洪鐘

食田終補祠廟崔山寇山殿石

層精舍山我雲光暎壯觀黛

色濃神威靈猛戰身縮足般足

利益施壯麗微妙崢嶸水以沈

名勝賞群指澄暉可謝之踟躕

是下也

狐狸。風海浸シメ。山嶽千丈峯。四座  
隱逸。擁護。芬心寶珠光明赫。  
觀喜。頽廢心崩。困寂。雲去イッ。  
看依。寂寞。老杖。蒼翁。憇對。林心。宇  
碑文。苔打。病恹。除滅。感深。淚衣。袖  
浸。汗。陌。兵。歿カレ。火。四。惟。驟。雨。廿。荒。靈。辰。虫  
携伽藍。灰。燼。上。優。賞。斃。鬪。亂。塵。

驗。稍。麻。奇。觀。清。旭。浪。穩。綿。繡。  
垂。迹。示。現。利。生。朗。月。曠。野。英。雄。  
凜々。敏。系。茂。旭。迭。岩。路。嶮。烟。白。落。  
栖。青。玄。衣。之。海。湖。猶。豫。幽。邃。  
結。界。世。變。隸。囚。卒。容。山。識。惟。躑。躑。踏。踏。  
觸。穢。呷。吟。若。了。雨。辰。封。典。豆。饒。  
遊。俠。衣。丹。青。斑。肉。肆。換。丹。楓。馬。口。

勞控馬車

漱ふひん月夜の日争らぬ

巾波發馬清長く静

絶峰花押と離之天地の飛入也

山木の美日京御邑飛るる

流市詰てて教馬波龍門もる

吾層盤糸くはとるも雄名天地も

早喜の酒き白ひ谷てて四羅浮

の夢のまをさすかしく挿へて去る壽

陽公のまのたけひ有

鐘心揚てて月も清ら

穴初穴飛てて三子又人紅粉と花ひ

一度く笑ててて

奇村の思ひ瞻も終る

足るは修成のまじり世口の岩根ツタサ勤下

八松原松葉

赤相西より北に

山中より山麓に

葎草の微荊棘杖と同。

夜草又のこりたまひ

薰風風水高を

旅草のまじりまじり

西林雨幸して

一とわあゝぬ流るる川瀬

日鳥翅はのりぬき草人草人

神徳度生泥益化

長平のまじり

臨白栲栲多信

~~~~~

海弘くそひん

岩をまわす

浪間の鵜浦三丁目の島

沖のあなをさきつりて入つた

る人もやうにまのりた室たに

~~~~~

松の丸島の陸軍の丸を

今一宮く講凡百古

△竹八月木六月廿四月竹木と

わいあつたかきこしつりあつた

~~~~~

△公直下宮極やうに

まのまわりの  
雨あつた

△史記の潜行より孔子曰く

の於治世を淳く勉<sup>ツ</sup>田と稼<sup>ク</sup>  
優<sup>ク</sup>盡<sup>ク</sup>馬と表<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>優<sup>ク</sup>袖<sup>ニ</sup>城<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>流<sup>ニ</sup>  
わきの事淡<sup>ク</sup>語<sup>ル</sup>微<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>ヤリ

△枝詞<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>受<sup>テ</sup>説<sup>キ</sup>終<sup>ル</sup>ニ

△蒼<sup>ク</sup>若<sup>ク</sup>蠅<sup>ノ</sup>の臭<sup>ク</sup>氣<sup>ト</sup>と遂<sup>ク</sup>入<sup>ル</sup>

△王<sup>ノ</sup>系<sup>ノ</sup>外<sup>ノ</sup>勤<sup>ク</sup>儉<sup>ク</sup>と守<sup>ル</sup>と野<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>ニ

△花<sup>ノ</sup>太<sup>ク</sup>者<sup>ノ</sup>幹<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>と飾<sup>ル</sup>こと受<sup>テ</sup>は

△物<sup>ノ</sup>僞<sup>ク</sup>假<sup>ク</sup>矯<sup>ク</sup>と智<sup>ク</sup>と西<sup>ノ</sup>直<sup>ノ</sup>殷<sup>ノ</sup>

△勤<sup>ク</sup>心<sup>ト</sup>と愚<sup>ク</sup>心<sup>ト</sup>と一<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>指<sup>ス</sup>名<sup>ノ</sup>利<sup>ノ</sup>の臭<sup>ク</sup>

△西<sup>ノ</sup>と東<sup>ノ</sup>と自<sup>ラ</sup>の邊<sup>ニ</sup>へ一<sup>ニ</sup>繪<sup>ク</sup>筆<sup>ヲ</sup>交<sup>ス</sup>

△善<sup>ク</sup>長<sup>ク</sup>の寂<sup>ク</sup>心<sup>ト</sup>と一<sup>ニ</sup>の依<sup>テ</sup>指<sup>ス</sup>今<sup>ノ</sup>の  
行<sup>ハ</sup>術<sup>ノ</sup>の乞<sup>ク</sup>餽<sup>ク</sup>る由<sup>ノ</sup>の置<sup>キ</sup>郵<sup>ト</sup>より  
衆<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>何<sup>レ</sup>物<sup>ノ</sup>の衛<sup>ル</sup>符<sup>ハ</sup>堂<sup>上</sup>の壽<sup>ク</sup>





△二月啓蟄 至分中

△三月清明 穀雨中

△立夏 四月小滿 中

△五月芒種 夏至芒種

十日計 極

△六月小暑 大暑 中

△立秋 處暑 中

△八月白露 秋分 中

九月

△寒露 霜降 中

△立冬 十月小雪 中

△十一月大雪 冬至 中







ハ<sup>ホハ</sup> <sup>フワ</sup>ヒ<sup>フヒ</sup> <sup>フイ</sup>フ<sup>フフ</sup> <sup>フ</sup>ヘ<sup>フヘ</sup> <sup>フ</sup>ホ<sup>フホ</sup>

ミ<sup>ミ</sup> <sup>ム</sup>ム<sup>ム</sup> <sup>メ</sup>メ<sup>メ</sup> <sup>モ</sup>モ<sup>モ</sup>

ヤ<sup>ヤ</sup> <sup>イ</sup>イ<sup>イ</sup> <sup>エ</sup>エ<sup>エ</sup> <sup>オ</sup>オ<sup>オ</sup>

リ<sup>リ</sup> <sup>ル</sup>ル<sup>ル</sup> <sup>レ</sup>レ<sup>レ</sup> <sup>ロ</sup>ロ<sup>ロ</sup>

ウ<sup>ウ</sup> <sup>エ</sup>エ<sup>エ</sup> <sup>オ</sup>オ<sup>オ</sup>

右注音ヲ抑音ト言フ左ハ塩梅ト

ア<sup>ア</sup> <sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup> <sup>キ</sup>キ<sup>キ</sup> <sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup> <sup>ケ</sup>ケ<sup>ケ</sup> <sup>コ</sup>コ<sup>コ</sup>

下ノ四字ノ爲ニ本被トナル故ニ人ニ

配<sup>配</sup> <sup>胃</sup>胃<sup>胃</sup> <sup>配</sup>配<sup>配</sup> <sup>因</sup>因<sup>因</sup> <sup>ア</sup>ア<sup>ア</sup> <sup>字</sup>字<sup>字</sup> <sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup> <sup>九</sup>九<sup>九</sup>

字ノ爲ニ韻トナル○イウエヲ四字ハ

下ノ九字ノ爲ニ韻トナル故ニ母トニ安

トシ縁トス喻ハ入母和合ニ如生  
子〇イウエヲ之四字ハ韻ニ非声

枕語

△心猿トモ意馬ヲイハル〇佛フツ〇值アツ時トキ遇アツ人ヒト

猪カウソク夫ツ子シ紙シ〇珍チン々ツ中チュウ〇素ソ素ソ譯ヤク譯ヤク

可イラツハ〇鯨キウ魚イサ〇椀ワンノ木キ〇艘イサネノ舟フネ〇利リ鬼キハ

喚ウチノ一イチ田テン仔ジ 奥易馬 沃ウツ懸ケン 井

こへだ石燒ヤク〇後ゴ波ハ〇全ゼン食シヤク瑪マ〇一イチ鑪ロ ナリ

呼コウキキ〇一イチ標ヒョウ半ハン唐タウ又マタ〇だダよヨけケ ハ

八宗 法相三論俱舍 地主 清水寺

成実律花山殿天台直言

夜殿ヨイノ俗ソク梳シ〇方カタ乃ノ人ヒト係ケイ和ワ〇尤カク與コ寺ジ

小鏡ヲトク

△日三竹下 日三竹 △ 出に言う 神徳を子

はふり 可やを 水とる川を矢やとるハ

汝 親を 小ぬり ヤミ なるを 後の

世の格 あふぬ 見え た べ 但も修る

△ ソニ干 昨食神 ヒモケ 供。巨萬の賊。陶朱カ貨殖

△ ウケキユミ 免道 然の 道 と

△ 軒 を 煮 て 珠の爛 と 根 も

か ら あ い る ん ー

△ 里神樂 山裡の 山 神樂 山 神樂 山 神樂

山神樂 山行所 神樂 の 玉 火 線香 の 服 と 靴

△ 冬 の 麻

神 と 世 月 時 あ ー ち ー 一 首 白 紫 の ー こ ー

ま ろ ー 一 麻 も 呼 ぶ たり 一 拾 遺 集 り ー と ー

お 火 仲 太 二 の 身 ハ 冬 も 麻 の 呼 ぶ 家 なり

十月 の 終 り ー と ー 。 接 酒 ー と ー 。

七月 接 酒 ー と ー 。





星宿及凡而不依時節等

△山三六海一分田四界

△阿彌陀佛、林一切諸芥ハ由

△天何言哉四特行正与百物生正与

天何言哉

△一天四海皆歸妙法

是則阿彌陀佛十リ  
精淨一光也ハ妙徳

ヲ金剛トモ般若若トモ妙法蓮華トモ言フ人モ

亦其微トル物ニテ靈妙ナリ大地ノ功德ヲ

地義ニ音サ薩トモ亦法華經ニテハ鬼子母

神トモ千人ノ万物生ルヲ云フ

△飯蔬食飲水曲肱而枕之樂亦

在其中心矣

△神道ニ此功德ヲ以百萬ノ神ト云

△傳ハ方ハ徳ハ極ニ

一切ノ物ヲ十リ

出生の正保の事

△祖<sup>名</sup>寛文初十九歳に<sup>して</sup>仕官を

退<sup>る</sup>又洛の<sup>事</sup>吟に詠<sup>詠</sup>を<sup>そ</sup>す<sup>人</sup>天和

の<sup>初</sup>ね<sup>三</sup>上<sup>上</sup>威<sup>し</sup>て<sup>武</sup>江<sup>深</sup>河<sup>川</sup>に<sup>沈</sup>

遊<sup>し</sup>一<sup>ち</sup>池<sup>の</sup>菖<sup>花</sup>に<sup>自</sup>己<sup>の</sup>眼<sup>を</sup>同

又<sup>依</sup>諧<sup>の</sup>一<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>か<sup>り</sup>に<sup>守</sup>守<sup>守</sup>の<sup>伊</sup>頂

和<sup>高</sup>の<sup>禪</sup>室<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>投</sup>子<sup>一</sup>碗<sup>の</sup>書<sup>所</sup>

と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>一<sup>依</sup>諧<sup>の</sup>運<sup>ひ</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>も

ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>三<sup>十</sup>三<sup>十</sup>の<sup>依</sup>諧<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>

ま<sup>ま</sup>詠<sup>詠</sup>に<sup>依</sup>詠<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>今<sup>ま</sup>依

諧<sup>形</sup>あり<sup>ま</sup>ま<sup>の</sup>みな<sup>なり</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>か</sup>

ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>天和<sup>の</sup>り<sup>り</sup>前<sup>成</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>へ

△法華三白

止<sup>止</sup>止<sup>止</sup>不<sup>不</sup>預<sup>預</sup>説<sup>説</sup>我<sup>我</sup>法<sup>法</sup>妙<sup>妙</sup>難<sup>難</sup>思<sup>思</sup>

△壹門闍如何成<sub>レ</sub>是佛乾屎  
概。屎<sub>ハ</sub>篋<sub>ハ</sub>千

△南壹阿弥陀佛<sub>ハ</sub>一切諸佛

諸<sub>ハ</sub>牙<sub>ハ</sub>十<sub>リ</sub>。南壹妙法蓮華

徑<sub>ハ</sub>十<sub>ハ</sub>方<sub>ハ</sub>分<sub>ハ</sub>此<sub>ハ</sub>三<sub>ハ</sub>世<sub>ハ</sub>諸<sub>ハ</sub>佛<sub>ハ</sub>多<sub>ハ</sub>寶

如<sub>レ</sub>未

△神道、天照太神<sub>ハ</sub>唱<sub>レ</sub>身<sub>ハ</sub>時<sub>ハ</sub>

八百萬神<sub>ハ</sub>十<sub>リ</sub>

樂<sub>ハ</sub>重<sub>ハ</sub>人

杖<sub>ハ</sub>山

易<sub>ハ</sub>曰

一陰一陽之謂道、繼之者善

十<sub>リ</sub>

△一元氣<sub>ハ</sub>九<sub>ハ</sub>旋<sub>ハ</sub>行

以<sub>レ</sub>德<sub>ヲ</sub>伊<sub>ハ</sub>友<sub>ハ</sub>金<sub>ハ</sub>剛<sub>ハ</sub>元  
般<sub>ハ</sub>若<sub>ハ</sub>十<sub>リ</sub>

△神道<sub>ハ</sub>高<sub>ハ</sub>天<sub>ハ</sub>原<sub>ハ</sub>十<sub>リ</sub>

天<sub>ハ</sub>浮<sub>ハ</sub>八<sub>ハ</sub>十<sub>リ</sub>

